

## 林業統計研究会誌に寄せて

林業試験場長 上 村 武

林業統計研究会の前身ともいふべき集まりが発足したのは、20年以上も前になる由である。会は当時の林業試験場、各大学、林野庁の測定、経理部門の新進学徒と、複雑な森林現象の解明に強い興味を抱いた文部省数理統計研究所の諸研究者が集まって作りだした、研究と実務を一体化する新しい研究討論会からはじまった。10年後に卵はひよこになり、毎年、シンポジウム、や合同研究調査活動を行なうなど組織化され、研究会として発展を続け、近年では森林経営だけでなく、より巾広い林業分野での数理統計活用と、電算機利用の指導的研究会に成長したようである。

私は林学者ではあっても、測定、経理部門の専門家でもなく、まして数理統計理論の専門家ではない。従って、林業統計研究会の業績の細部についてよく知っているわけではない。しかし、戦後統計数理の応用と電算機の活用が、他分野もさることながら、森林現象の数量化や実験計画の作制、試験結果の予測また実際の経営案の編成、各種森林計画の設計検討に極めて大きい効果をもたらしたことは、肌で感じとっている。そしてそれが戦後早々から、将来の林業研究の方向を予察し、この分野での基礎研究と応用技術の開発を促進することの重要性に思いをいたして、着実にその研究を進めたメンバーの方々の努力に基づいていることに、心から敬意を払いたい。この輝やかなしい成果は、数学や林学の基礎的研究を実務分野に適応して、常に現地で実証されたデータと、その取扱いを中心にした実学に地道に取り組んでこられた姿勢からうまれたものといえよう。

しかし、林業にとっては、数理統計理論も、経営分析も、あくまで手段であって目的ではない。世の中には、時折、手段がいつの間にか目的となり、仮説がいつの間にか一人歩きをして真実と誤まれる例が見られる。林業統計分野でも、これに類することは十分に起り得るのではなからうか。怪しげなデータが、統計理論にもとづいた処理をしたゆえんをもって、大道をかつ歩する例は

特に若い研究者によく見られる。

コンピューター病という評があらわれるのも、またむべなるかなである。

この研究会がいままで、研究会誌を持たなかったのは、豊かでない会の経済事情と、繁雑な出版事務の問題から、と聴いている。

海外でも本会の活動が注目されるにいたった今日、広くその研究活動と成果とを普及するため、本誌が刊行されるにいたったことは、まことに御同慶のいたりであるが、本誌がまた、すでに新進ではなくなった経験豊かな諸先輩と、若い研究者、実務家の間の交流の場となり、全員活動を盛んにし、研究人口を増大して経済上や事務上の問題を解消すると共に、本誌によって、林業技術が一段と発展することを、林業界のために心から期待し祝福したい。